学校だより　３月号　　令和６年２月２９日

横浜市立義務教育学校
緑園学園
RYOKUEN COMPULSORY EDUCATION SCHOOL

横浜市泉区緑園五丁目 28 番地　前期課程 ☎045（811）6710 後期課程　☎045（811）6030

「 義務教育学校 」

校長　野口 弘之

この冬は、例年よりも寒暖差が激しく、雨の日も多くなっています。温暖化の影響でしょうか、かつての冬のイメージとは明らかに違うと感じてしまいます。そのような気候の中でも、河津桜は、ひと足早い春を届けてくれています。

今年度もあとひと月となりました。各学年ともこの一年間の学習やさまざまな活動を振り返り、次年度に向けた準備を行っていますが、中でも９年生は義務教育課程の修了である卒業式に向けて、また、６年生は義務教育前期課程の修了に向けて、最後のまとめにしっかりと取り組んでいます。

さて、温暖化と言えば、地球規模の環境の変化ですが、その一方、人間が営む社会に目を向ければ、ここ数十年で高度情報化社会へと大きく変化しています。学校もその中にあって、かつてない変化の時期を迎えています。例えば、教育課程のスタンダードである国の学習指導要領では、コンテンツからコンピテンシーへの変更、すなわち、指導する内容の重視から、資質・能力育成の重視へと転換されました。また、平成 28 年には、学校教育法が改正され、学校教育制度の多様化と弾力化を推進するために、新たな学校種として、「義務教育学校」が位置付けられました。

本校は、昨年度市内３校目の「義務教育学校」として開校して以来、その特長を生かして、特色ある教育活動に取り組んでいますが、私自身も校長として日々、１年生から９年生までの児童生徒と触れ合う機会に恵まれています。先日のある一日です。１校時１年生に読み聞かせ、２校時職員との打合せ、３校時９年生の活動（百人一首）に参加、４校時１年生に読み聞かせ、給食時間は６年生との会食といったように、他の学校では経験することのできない貴重な経験をさせていただいています。

「義務教育学校」は、一般的には、早期のカリキュラム導入、小学校段階の教科担任制、学校行事の一体化、独自教科の創設などの特徴があり、中１ギャップの解消や系統性を意識したカリキュラム編成、異学年交流による精神的な成長、そして何よりも、９年間を通して子どもたちの成長を見ていくことができるというメリットがあります。それに対して、人間関係の固定化や小学校文化と中学校文化の違いといったデメリットがあると言われたりもしますが、そうした課題を乗り越えて、緑園らしさを常に追求し、子どもたちが、安全安心に日々の学校生活を充実して過ごし、資質・能力を確実に育んでいくことができるように今後も努めてまいります。

改めまして、この１年間、保護者の皆様、地域の皆様、また、関係者の皆様には、本校の教育活動に対しまして、ご理解とご協力をいただきましたこと心より御礼申し上げます。開校時に掲げました「　真のグローバル人材に　自主　協働　創造　」のスクールモットーと学校教育目標の下、職員一同、今後も子どもたちの育成に励んでまいりますので、次年度も引き続き、ご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。